

〈短歌〉

— 全体講評 —

この三十年は、何はともあれ日本では戦争がなく平和な時代でしたが、災害は多く、様々な問題を抱えた時代だったことも確かです。一言では言えない複雑な時代を、一首に詠むという難しいテーマだった訳ですが、応募歌は自分の生き越し方に引き寄せ、個々の目線でテーマ「平成」という時代を、切り口鮮やかに詠われていました。十代の方は自分の育った時代を、五十代の方は壮年期をと、それぞれの思いで捉えた「平成」の姿が、クリアな輪郭を得て、浮かび上がったことは大変良かったと思います。ただ、短歌の目線は、日常の小さな心の揺らぎを映すのに適した詩型で、この大きな題は詠い難かったと思われる、応募数が減ってしまったのは残念でした。そのような状況にも拘わらず、幅広い年代層の歌が見られたことを興味深くも思いました。

長澤 ちづ

【最優秀賞】

あまたなるプラスチックの断片が海の生きもの飲み込んでいる

阿部 由香里

— 講評 —

平成の世の地球レベルの課題は環境問題。中でも深刻なプラスチック粒子の海岸汚染を真正面から詠う。三句目の「が」がポイント。小さな物に大きな生物を飲み込ませている。

【優秀賞】

ため息の訳は枯葉のふきだまりふざけてばかりの季節のあとの

石邊 綾子

— 講評 —

五十代の方の歌であれば、この三十年は大人になって社会で活躍した時代。そして今や枯葉の吹き溜まる人生の季節ともよめる。ため息のようなF音に自嘲の思いが窺える。

【優秀賞】

新しき御代すこやかに歩まんと卒寿の筋トレ励みて居たり

高橋 すみ

— 講評 —

新しい御代に期待を寄せる作者は、大正・昭和・平成と三代の世を生きて来られた方だ。卒寿の今もお元気で筋トレに励む。その姿は現代の高齢者の在り方でもある。

【優秀賞】

語り部は同年代の女の子くじけず生きる決意に涙

遠藤 加津樹

— 講評 —

平成は災害の多い年だった。東日本大震災で被災した女生徒だろうか。体験談を語る会に参加した同世代の作者。辛い体験を克服し、前向きに生きる姿勢に共感を示す。

【優秀賞】

缶を蹴るカランと音はかなしくて平成時代はかえって来ない

橋本 涼

— 講評 —

幸せだった子ども頃の時代が過ぎ去ることに並々ならぬ哀惜の念の籠る歌だが、缶を蹴る乾いた音には、作者の意図を離れて時代の負の部分の思わせる。

俳句

— 全体講評 —

今年も兼日題を「平成」として、詠んでいただきました。しかし、表現として題を句に詠みこんだ方は少なく、詠みこまずに平成の日常を表現した方が多かったです。表現内容としましては平成三十一年四月末日に終わります、「平成」を平和や災禍の多かった時代と捉え、感謝と次の時代への安寧の期待や想定外の自然への備えと人間の絆等を詠む方が多かったように思いました。選句では小さな発見がある詩か、に力点を置きました。俳句は、「省略」して詠み、「修復」して読むと言われております。詠む人が重複した意味の語を削り、感性によって言葉とことばとをあたらしく接着させますと、読む人は作者の削った世界と、あたらしく語を繋げた感性の世界から詩を復原させることができます。俳句をこの様に愉しみましょう。今年も応募作の中に素敵な詩が多数ございました。

梶原 美邦

【最優秀賞】

手をつなぐガン病棟の春裕 はるあわせ

近藤 昭子

— 講評 —

華やいだ裏地のついた着物が春裕。それを着てガン病棟の廊下を、手をつないだ二人が歩いてゆく。家族と患者の掌がしっかりと結び合っている。深い祈りと支える温もりが通い合ってゆく。

【優秀賞】

影ひとつ動くものなき炎暑かな

加藤 和子

— 講評 —

外に出るとしずけさがカーンと頭上でなったような気のする炎暑。歩くと影を奪われてゆく様な不思議な感覚に襲われる。見渡してみると、草木も石もみんな沈黙している。

【優秀賞】

遅き子を待ちて痩せゆく毛糸玉

河村 美恵子

— 講評 —

子どもは塾やクラブ活動など、多忙な毎日である。それに関わる思いもよらぬ事件などが起こる。親は子どもの帰りが遅いと、悪い方へ思いを巡らし、編む毛糸玉が痩せるほどの心配をする。

【優秀賞】

秋すだれ外して空の高さかな

木藤 薫子

— 講評 —

風が涼しくなり、日差しが柔らかく澄んでくると、それぞれの家は簾を外して仕舞う。今まで隙間から見えた風景が突然開けてくる。切れ切れだった空が高く澄んで広がる。

【優秀賞】

紅葉づるや妻に逸れて乾門

高浪 国勝

— 講評 —

昨年十二月一日から九日間、皇居の乾通りが一般公開され、紅葉を堪能した。夢中になっている間に、妻の姿が見えない。とりあえず退出口である乾門（皇居北西の門）で待つことにした。

【優秀賞】

寒の街小走りで行く待ち合わせ

塚田 響輝

— 講評 —

立春前の約三十日間が寒期。小寒・大寒と身が縮むような日が続く。街も息をひそめているかのように、影を落としていく。出るのが遅い分、約束の時間に遅れそうだ。息が白く乱れる。

【優秀賞】

雪嶺の巒ひだ鮮明にキックオフ

露木 君江

— 講評 —

キックオフはボールを蹴って試合を開始、または再開すること。ラグビーの試合。観客の開始の緊張した眼が、蹴って上がりきったボールの背後に、雪山の巒を一瞬鮮やかに捉えた。

【優秀賞】

片隅に紅梅のある八百屋かな

藤原 ミツエ

— 講評 —

紅梅は白梅にやや遅れて花期を迎える。それを昔日より愛でたものだ。野菜を商う八百屋の片隅に紅梅。この時季はロコミ広告となって、紅梅の八百屋さんとして親しまれている。

【優秀賞】

橋脚を水面に映し春を待つ

宮田 いさみ

— 講評 —

脚の長い、スタイルの良い橋である。冬の川は水量が少なくなる。寒々と川の中の小川が、水溜りから水溜りへと、僅かに流れゆく水に脚を映して、雪解けを待つ構えである。

〈川柳〉

— 全体講評 —

平成も今年で幕を下ろし、新しい元号になります。平成に馴染んできた暮らしに元号の交代は感慨深いものがあります。課題が名詞の場合は、題を詠み込むことが多いですが、今回は「平成」の語句の使用を必須としていません。そのため、「平成」でなくても通る作品が多く、テーマが霞んでしまったのは惜しかったです。ちなみに、「平成」の語句を入れた句は全体の23%でした。大多数は題を入れずに詠んでいます。課題を示唆する表現が句の中に欲しいです。個人の行動を詠んでも、他人には分かり難いでしょう。時代がはつきりしない句は遠慮して、平成を伝える表現や内容が詠まれているかも考慮しました。好きな句と好い句は違い、自選で迷うことも多いです。次回の参考にしてください。

荻原 美和子

【最優秀賞】

定年のゴール年々遠ざかり

水戸 浩一

— 講評 —

平均寿命が延び、定年を延長する人が少しずつ増えている。健康で働く環境が整ってきたからであろう。少子化の影響もあり、働き方も多様になった。

【優秀賞】

ワンタッチ消えゆく紙幣味気なさ

長田 隆広

— 講評 —

キャッシュレスの普及は目覚ましく、タッチするだけで紙幣やコインを出すこともなく支払いが済む手軽さが受けている。愛着がある紙幣が消える寂しさ。

【優秀賞】

災害へ打ち勝つ心常に持ち

鈴木 昭子

— 講評 —

平成を振り返ると災害に立ち向かう被災者の姿が目には浮かぶ。屈することもなく、強い精神力持ち続ける事は容易ではないと思う。力強い一句。

【優秀賞】

戦争がなかった幸に感謝する

中田 鈴

— 講評 —

その通りであろう。戦後から平成へと戦争を放棄した日本は平和を取り戻した。平穏な暮らしをありがたいと思う。穏やかな日常がこれからも続くを願う。

【優秀賞】

ネット化のテンポに悩む老いた脳

山口 ひさ乃

— 講評 —

インターネットの普及は目を見張る速さで暮らしの中に浸透している。高齢者がネット化に対応できない場合も多いだろう。「老いた脳」が共感を誘う。

【優秀賞】

近隣でヨイシヨと老いを支え合う

山崎 照子

— 講評 —

高齢化の時代を迎え、孤独になりがちな高齢者を支えるご近所の温かさが伝わる。引き籠もりがちな年寄りに寄り添う、地域の人々。掛け声に善意が透ける。